



ニッポン

ドクター和の

臨終図巻

旧日本軍で細菌兵器開発のために人体実験を繰り返していた731部隊。その職員表が国立公文書館で発見されたという報道が7月19日にありました。しかし今の若い世代は、「731部隊」と言われても知らない人が圧倒的でしょう。興味を持たれた方は、『悪魔の飽食』を読んでほしいです。1980年代に出版され大ベストセラーとなったノンフィクションです。しかし掲載写真に内容の違つものが見つかったことから、右翼団体が「捏造(ねつぞう)だ」と出版社に嫌がらせをしたため絶版・回収騒ぎに。その後、角川春樹氏が「政治的理由で本が葬られることはあってはならない」と手を挙げて角川書店から再出版された

316 小説家 森村誠一



という出来事もありました。本作を始め、数々の問題作を世に生み出し、角川映画の原作者としても名を馳せた小説家の森村誠一さんが7月24日、都内の病院で亡くなりました。享年90。死因は肺炎との発表です。731部隊名簿発見の報道から5日後の訃報ということで、不思議な因縁を感じたのは僕だけではないでしょう。

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』をけったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

老いてこそ未来に焦点

森村さんが「老人性うつ」に苦しんだ体験を克明に綴(つづ)った『老いる意味 うつ、勇気、夢』(中公新書ラクレ)を上梓されたのは2年前の88歳のとき。本人は最初は乗り気ではなく、夢と希望を与える作家が自分自身の弱さを読者に見せてはいけないと躊躇(ちゅうちよ)したといいます。が、編集者に勧められるまま書いてみれば、「私もそう!」と高齢世代から大きな反響を呼び、ベストセラーとなりました。

老人性うつとは、65歳以上の「うつ病」のことを指します。明るく快活だった人が、気分が激しく落ち込み外に出ることも人に会うことを億劫(おっくう)に感じる。残された時間を考えて焦りや不安に苛(さいな)まれるといった精神的症状、及び頭痛や胃痛、下痢や便秘、食欲不振や不眠など身体的症状も表れます。

森村さんも、言葉が出てこない症状が一番苦しかったといいます。そこで、とっさに思い出せない言葉やふと思いついた言葉を、チラシの裏に書いては家中に貼り付けました。そうやって3年かけてうつを克服されたのです。

「過去に目を向ければ、いまの自分がいちばん年老いているが、未来に目を向ければ、いまの自分がいちばん若い」。この一文に僕は胸を打たれました。「今日の自分が一番若い!」老いてこそ明るく未来を向いて生きたいものです。